

# 中世フランス文学における英雄の剣

——ボードゥーの剣オノレをめぐる——

Les épées héroïques dans la littérature française du Moyen Age :  
à propos d'Honorée, l'épée de Beudoux

渡 邊 浩 司

## 要 旨

ロベール・ド・ブロワが13世紀後半に著した『ボードゥー』は、ゴーヴァンの息子ボードゥーの幼少年期に焦点を当てた物語である。母の手で騎士に叙任されたボードゥーが一連の冒険の末に、群島王の姫君ポーテを妻に迎える筋骨きの中で重要な位置を占めるのは、ボードゥーが最初の試練で獲得する「オノレ」という名の剣である。そもそも古フランス語によるアーサー王物語群では、アーサー王の剣エスカリボール（エクスカリバー）を別にすれば、オノレのように固有名を伴う名剣は珍しい。オノレという名は騎士が守るべき「名誉」というキーワードをもとにしているが、この名の由来を作中人物が説明している点は特筆に値する。

## キーワード

アーサー王物語, ロベール・ド・ブロワ, ボードゥー, 剣, オノレ

## 1. はじめに

中世フランス文学では、《武勲詩》の登場人物の剣に名前がつけられていることが多い。それは戦士に武勇を約束してくれる剣がことのほか重要であることの証である。こうした剣の名前の中には、一見して意味が明瞭なものもある。『ローランの歌』<sup>1)</sup>の主人公の剣「デュランダル」の名については解釈が分かれるが、シャルルマーニュ（カール大帝）の剣「ジョワイユ

ーズ」は「喜ばしい」、ローランの盟友オリヴィエの剣「オートクレール」は「いと清らかな」、異教徒バリガンの剣「クルスーズ」は「怒った」、ドーン・ド・マイヤンスの剣「メルヴェイユーズ」は「驚異的な」、ジラール・ド・ルシヨンの剣「ベル（またはベラン）」は「美しい」、オジエ・ル・ダノワ（デーン人オジエ）の剣「コルト（またはコルテヌ）」は「短い」、ユーク・カペーの剣「コンスタンス」は「不変・粘り強さ」という意味である<sup>2)</sup>。

これに対し、叙事文学以外のジャンルでは、名前のついた剣が出てくることは珍しく、《アーサー王物語》では固有名詞よりも「不思議な帯革の剣」、[冒険の剣]、[折れた剣]<sup>3)</sup>のように特別な形容語を伴った剣が多い。したがって、古フランス語で「エスカリポール」（ラテン語名カリブルヌス、英語名エクスカリバー）と呼ばれるアーサー王の剣は、むしろ例外的なケースとして異彩を放っている<sup>4)</sup>。剣が重要なモチーフとなっているクレティアン・ド・トロワ<sup>5)</sup>の遺作『グラアルの物語』<sup>6)</sup>前半で主人公ベルスヴァルに授けられる不可思議な剣<sup>7)</sup>にも、作者不詳『双剣の騎士』の主人公メリヤドゥックが手に入れる3本の剣<sup>8)</sup>にも、後期流布本サイクルに属する『続メルラン物語』に登場し「双剣の騎士」と呼ばれるバラエンの2本の剣にも、名がつけられてはいない。

こうした観点から注目されるのは、ロベール・ド・ブロワ（Robert de Blois）作『ボードゥー』（*Beudoux*）<sup>9)</sup>である。円卓騎士団の筆頭騎士ゴーヴァン（英語名ガウエイン）が「ウェールズの貴婦人」との間にもうけた息子ボードゥーを主人公としたこの物語では、ボードゥーが騎士になって最初の試練で獲得する剣に名がつけられている。本稿では本邦で未紹介のままにとどまってきた『ボードゥー』に注目し、主人公と名剣の関連と、作中で剣の名が持つ意味について考察する。

## 2. 『ボードゥー』の筋書き

ロベール・ド・ブロワは13世紀後半に北フランスで活躍した詩人（トルヴェール）であり、『帝王学』と『貴婦人への訓戒』という2冊の教訓書、2編の宗教詩『三位一体について』と『この世の創造について』、さらには恋愛物語『フロリスとリリヨベ』などの著作を残している。そして《アーサー王物語》に属する『ボードゥー』は、ロベールが最後に著した作品だと考えられている<sup>10)</sup>。ロベール・ド・ブロワの作品群を伝える写本群は3種類現存するが、このうち『ボードゥー』を収録するのは13世紀末に筆写されたパリ・フランス国立図書館フランス語24301番写本だけである。『ボードゥー』は8音節詩句で書かれた韻文物語で、最後の部分が欠落しており、現存の状態では4564行からなっている。物語ではボードゥーの「幼少年期」に焦点が当てられている。

物語は、アーサー王宮廷へゴーヴァンの父逝去の報が届くところから始まる。アーサー王は聖ヨハネ祭にゴーヴァンの戴冠式を行うことにし、諸侯全員に参加を求める。この知らせを伝え聞いたボードゥーが王宮へ赴く決意を述べると、母は息子にさまざまな忠告を授け<sup>11)</sup>、息子に2つの楯を渡し、以後は「2つの楯を持つ騎士」と名乗るよう勧め、さらに母みずから息子を騎士に叙任する。仲間たちとともに出立したボードゥーは道中である乙女に出会う。それは群島王の姫君が送り出した侍女クレレットで、苦境にあった姫君を助けてくれる騎士を探していた<sup>12)</sup>。マドワヌ王が美しい姫君との結婚を望み、姫君の城を攻囲していたからである。クレレットが乗馬用に使っていたラバの鞍の前には、それまで誰一人として鞍から抜くことのできなかった「オノレ」という名の剣が吊り下げられていた。ボードゥーはこの剣をいとも簡単に抜いたことでオノレの所有者となり、姫君の救出へ向かう。

旅の途中で勇猛な騎士エルマレユスとの一騎討ちを制した後、ボードゥーはようやく姫君の居城に近づく。ボードゥーは待ち伏せしていたマドワヌ王の臣下15人との戦いを制し、ようやく姫君との対面を果たす。姫君はポーテ（「美」の意）と名乗るが、ボードゥーは「2つの楯を持つ騎士」と名乗るにとどめる。その後、ボードゥー軍とマドワヌ軍が激突するが、最終的にはボードゥーがマドワヌ王との一騎討ちを制し、マドワヌ王は捕虜としてアーサー王の許へ送られる。そこに到着したボードゥーの母は、マドワヌから息子の消息を聞き嬉しく思う。アーサー王はゴーヴァンの戴冠式に先立ってボードゥーとの対面を望み、ゴーヴァンの提案に従ってウィンチェスターで馬上槍試合を行うことで、ボードゥーを呼び寄せようとする<sup>13)</sup>。試合の開催を伝え聞いたボードゥーは、婚約したポーテを母と王妃の待つロンドン<sup>14)</sup>へ向かわせ、みずからは身許を隠して3日間の馬上槍試合に参加する。初日と2日、一番の活躍を見せたボードゥーは3日目に父ゴーヴァンと戦い、互いに身許を知らぬまま対戦は互角に終わる。ロンドンに到着したボードゥーは一同から熱烈な歓迎を受ける。物語はゴーヴァンが息子と自分の戴冠式の準備を行うところで中断している<sup>15)</sup>。

### 3. ボードゥーと名剣との出会い

『ボードゥー』で主人公がいわくつきの剣を初めて目にするのは、母から騎士に叙任され12人の仲間とともに出立してまもなく、群島王の姫君ポーテに仕える侍女クレレットに出会ったときのことである。クレレットは豪華な身なりで、雪のように白いラバにまたがっており、馬具も装備もすべて見事なものだった。鞍の前の部分には1本の剣が吊り下げられており（vv. 587-588）、貴重なルビーでできた柄頭には高価な聖遺物が収められ（vv. 607-610）、柄は少し大きく頑丈ながらも固すぎることはなかった（vv. 611-612）。語り手の説明によれば、剣は曲がることも折れることもなく<sup>16)</sup>、「カインがアベル

を殺害して以来」(v. 615) これほど鋭利な刃が存在したことはなく、刃には金文字でイエス=キリストを表す3つの文字が刻まれていた(vv. 617-618)。剣の長さは6フィートで、手ごろな重さだった(vv. 619-620)。夜に剣から放たれる光は、教会の大ろうそくの光と同じほど大きかった(vv. 621-622)。正当な持ち主がこの剣を手にして戦えば、必ず勝利が約束されたという(vv. 623-624)。

こうした語り手の説明の後、クレレットとボードゥー一行との会話の場面が続く。落胆していた理由を問われたクレレットは、先の剣をアーサー王の宮廷へ運んだが、鞘から剣を抜くことができるほど勇猛な騎士が見つからず、おまけに勇者ゴヴァンが不在だったことを明かす。クレレットによると、これほどの名剣はこれからも見つかることはなく(vv. 648-649)、鞘から剣を引き抜くことができる者は他のすべての騎士にもまして優れた名声を得ることになるという(vv. 657-658)。そしてクレレットはこう付言する。

Tant est grans honors de l'espee :

Por ce l'apelle on Honoree. (vv. 659-660)

この剣の名誉はそれほど大きいのです。そのため剣は「オノレ」と呼ばれているのです。

今は亡き群島王が病床にあったとき、この剣を立派に使いこなせる者にしか一人娘ポーテを嫁がせてはならないと臣下たちに誓約させたため、それ以来ポーテが名剣オノレを保管していたが、鞘から剣を抜ける者がいまだ見つからずにいるのだという。その間に勇猛で大胆なマドワーヌ王が、比類なき美女だったポーテ<sup>17)</sup>との結婚を望み、「剣の試練」を経ることなく姫君の領土内に攻め入ったため、姫君は臣下たちの助言に従ってクレレットを使者として円卓騎士団の許へ送ったというのである<sup>18)</sup>。

クレレットの話聞いたボードゥーは仲間たちに剣を抜くよう求めるが誰一人成功しない。そこで挑戦したボードゥーは、いとも簡単に剣を抜いて鞘の中に戻す (vv. 725-727)。そのためクレレットは、ボードゥーをオノレの正式な所有者として認め、神が彼に授けた「名誉」(‘Lonor’, v. 736)は各地に伝わることになるだろうと述べている。

ボードゥーが挑んだ「剣の試練」は、12世紀から13世紀にかけて著された数多くの作品にさまざまな形で登場し、試練を完遂できる者だけに課された「宿命」を表している<sup>19)</sup>。そしてそこでは、名剣のほうが相応しい所有者を選んでいる。ロベール・ド・プロワはこうした「剣の試練」伝承から着想を得て、ボードゥーが名剣オノレを鞘から抜く場面を創り出したと考えられる。

#### 4. 「名誉」の剣オノレ

主人公ボードゥーが所有することになった剣の名「オノレ」(Honoree)は、「名誉」を意味する名詞「オノール」(‘honor’または‘onor’)に対応する動詞「オノレ」(honorer, 「名誉を授ける, 称える」の意)の過去分詞を名詞化したものであり、クレレットは先の引用箇所 (vv. 659-660) で剣の名「オノレ」を「名誉」と明瞭に関連づけている。つまり「オノレ」は「名誉」の剣なのである。オノレの名が物語中に初めて現れるのは、660行目のクレレットの科白の中である。この剣の名にこめられた「名誉」の重要性については、語り手による物語の序文のみならず、筋書きの冒頭でボードゥーの母が行う助言でも強調されている。

序文によると、物語はアーサー王の時代に名声を誇った貴婦人(「ウェールズの貴婦人」と、彼女がアーサー王宮廷へ送り出した息子(ボードゥー)をめぐる話であり、彼女がどのように息子に教育を施し、高貴な息子がどのようにその教えを心に刻んだのか、その後息子に何が起き、己の価値に

より息子が「その後かくも大いなる名誉を得るに至ったか」(‘Monta puis en si grant honor;’, v. 16) が語られるという。ここでの「大いなる名誉」とは、この世が続く限り3つの王国の支配者となるボードゥーの名が人々の記憶にとどめられることを指している。ロベール・ド・ブロワは序文において、大半の作中人物には物語の結末近くまで「2つの楯を持つ騎士」という異名で知られる主人公の本名ボードゥーだけでなく、ボードゥーがみずからの力で「名誉」を獲得し王として戴冠する筋書きまで手短かに明かしてしまっている。

序文に続いて物語が始まり、主人公のボードゥーからアーサー王の宮廷に向かう覚悟を告げられた母(「ウェールズの貴婦人」)は、息子にいくつかの助言を授けている(『ボードゥー』の校訂者ルメールは、「貴婦人」の助言を大きく7つにまとめている)。最初の助言では息子に「寛大さ」(‘largesse’, v. 182)を勧めたうえで、できるかぎり「名誉」(‘honor’, v. 187)を追い求めるよう忠告している。戦いで「名誉」(‘Honor’, v. 191)を手に入れば、死後も盛名をはせることになるからである。また3つ目の助言では、「かつてこれほど立派なことが羊皮紙に書き留められたことはなかった」(‘(...) onkes en fuel / De parchemin ne fu escrits / Plus bez, q’aussi bes ne soit cis.’ vv. 252-254)と前置きしながら「貴婦人」は、「なによりも名誉を手にし、愛されるよう努めて下さい。名誉はとて大きな財産なのですから。」(‘Sor toutes choses vos penés / D’avoir honor et d’estre amés. / Mout est honors riches avoires.’ vv. 261-263)と述べている。以上のようにロベール・ド・ブロワは、名剣「オノレ」が登場する以前に、剣の名に含まれる「名誉」の重要性を喚起している。

## 5. 騎士エルマレユスとの一騎討ち

姫君ポーテの侍女クレレットが「剣の試練」を説明する件で初めて明かされた剣の名「オノレ」は、以後物語の結末までに3度しか出てこない。

そのうちの1つが、ゴーヴァンの従兄弟（したがってボードゥーの縁者）にあたる円卓の騎士エルマレウス<sup>20)</sup>との一騎討ちの場面である。名剣オノレの正式な所有者となったボードゥーがボーテの救出へ向かう旅の途中でエルマレウスと対戦することになったのは偶然ではなく、クレレットがボードゥーの力量を試すためにあえてこの場所へ立ち寄らせたのである。ボードゥーにとってこれは、本試練に先立つ予備試練にあたる。

オルカニー王の息子エルマレウスは、愛するモンタボール王の姫君から20人の騎士を決闘で倒すことができれば愛を与えると約束されたため、名声を求める遍歴騎士たちが通過する場所に陣取り、すでに19人の優秀な騎士を倒していた。20番目の相手として立ちはだかったのがボードゥーであり、2人はまず馬上での槍試合で壮絶な戦いを見せる。互いに重傷を負いながらも、次には剣での戦いに移る。この時点でボードゥーはすでにオノレを手に戦っているはずだが、すぐには決着がつかない。剣での打ち合いが続く中、突如オノレの名が出てくる。

Une chose mout li agree :

Mout trueve trenchant Honoree

Et il c'en seit mout bien aidier,

Ses colps saigement emploier. (vv. 1170-1173)

彼（＝ボードゥー）にとってとても幸いだったのは、オノレの切れ味が抜群だったことである。そのため彼はこれを実に見事に使いこなし、巧みに打撃を繰り返すことができた。

剣の打ち合いはしばらく続き、両者は大怪我を負って大量の血を流しながらも互角の戦いを続ける。2人の足許を流れた血で牧場全体が濡れるほどだった。その後エルマレウスはボードゥーの激しい一撃をかわし、逆に



相手をひざまずかせる。ここで戦況を見守っていたクレレットが叫び声をあげたため、己の劣勢に恥じ入ったボードゥーは相手の兜の右側を剣で叩き、相手の右腕に怪我を負わせる。エルマレユスは左手で剣を握って戦う羽目になり、降伏よりも死を選ぶ覚悟だったが、最終的にはボードゥーの勧めに従って降伏に応じる。

エルマレユスはそれまで無敗を誇った勇者で、ボードゥーの捕虜としてアーサー王宮廷に現れたとき、彼が初めて敗北を喫したことに誰もが驚いたほどだった。しかし名剣オノレを手に戦うボードゥーが、戦いに勝利するまでこれほどの時間を要し、みずからも手負いの身となる筋書きは、ヴァース作『ブリュット物語』（1155年）でエスカリポール（エクスカリバー）を手にサクソン兵たちをなぎ倒していくアーサー王と比較すると意外に思われるかもしれない。ヴァースによると、「アーサー王は拍車をかけ、楯を胸に構え、片っぱしからサクソン人に斬りかかり、地面に打ち落とす。〔中略〕剛腕で武勇に優れたアーサー王は容赦なく、楯を掲げ剣を抜き、敵目がけて進む。敵の一群を蹴散らし、右へ左へと打ち殺し、彼ひとりで味方全員が殺した数より多く、四百人を殺し、哀れな最期を遂げさせた。』<sup>21)</sup>

## 6. マドワヌ王の15人の臣下との戦い

『ボードゥー』のクライマックスは、マドワヌ王が率いる軍とボードゥーが率いる軍との戦いである。マドワヌ王は、「剣の試練」を経ることなく群島王の姫君ポーテとの結婚を望み、ポーテの領内への侵攻に及んでいた。この戦いのさなかに、名剣オノレの名が2度出てくる。

まずは攻囲中のマドワヌ王が、恋敵となった「2つの楯を持つ騎士」の噂を聞いて嫉妬し、ポーテへの愛ゆえに憔悴する場面である。マドワヌ王を心配した15人の臣下は、ポーテの許へ向かう「2つの楯を持つ騎士」（ボードゥー）を捕らえることで、マドワヌ王とポーテの結婚を確実にし

ように考える。ボードゥーはこの事情を知り、まずは臨戦態勢にあった5人と戦う。1人目を落馬させて殺め、2人目と3人目を槍で刺して殺め、残り2人にも優勢に立つ。そこへ残りの10人が駆けつけ、ボードゥーは落馬させられる。そこでボードゥーは「鋼の大きな剣を両手でつかみ」(‘Le blanc d’acier a deus mains prent,’ v. 1977), 首に掛けていた楯を外す。騎士たちはボードゥーに襲い掛かり、治癒に3カ月はかかる怪我を7つも負わせる。意を決したボードゥーが野獣のように激怒し、「両手でオノレをつかみ、かくも激しい打撃を与えたため、力づくで相手を全員殺めてしまった」(‘Adous mains Honoree tient, / S’en fiert colp si desmesurez / Qu’a force les a toz tuez.’ vv. 2001-2003)。結局、敵の12人が落命し、3人が降伏する。ボードゥーは生き残った3人に12人の遺体を贈り物としてマドワーヌ王の許へ届けるよう命じる。

この場面では、ボードゥーが最初に両手でつかんだ「鋼の大きな剣」(v. 1977)は、劣勢になった時点で同じく両手でつかんだ「オノレ」(v. 2001)と同一の剣だと思われる。先述した騎士エルマレユスとの戦いのときと同じく、ボードゥーは最初からオノレを手にしながらも、敵兵から重傷を負わされ、戦いを終わらせるのに難儀したと考えられる。このように描写することでロベール・ド・プロワは、本来剣に備わっていたはずの驚異を縮減し、主人公が名剣を使いこなすプロセスに現実味をもたせようとしたのではないだろうか。

## 7. マドワーヌ王の軍との戦い

クレレットの先導でようやくボーテの城へ到着したボードゥーは、ボーテとの対面を果たし、2人は心を通わせる。そしてマドワーヌ王の軍との決戦に先立ってボードゥーが立ったまま食事をする場面に、オノレの名が登場する。

La pucele tout en plorant

Encoste lui tient Honoree, (vv. 2582-2583)

乙女 (=ポーテ) は泣きながら、彼 (=ボードゥー) の傍らでオノレをつかんでいた。

そしてポーテはボードゥーに、白い袖をつけていくよう求める。戦いのさなかにその袖を目にすれば、彼女への愛ゆえにボードゥーの力が増すようにという配慮である<sup>22)</sup>。その後、ボードゥーを始めとした騎士の一団はそろって出陣する。

注目すべきは、この箇所数十行前で、ボードゥーがマドワヌ王との戦いの前に仲間の騎士たちの士気を高めるために述べた言葉である。

Pensez de vos honors garder !

(...)

Bien doit frans hons mortel estor

Soffrir por garder son honor ; (vv. 2527-2531)

あなたがたの名誉を守ることをお考え下さい！(中略) 高貴な人は己の名誉を守るために、つらい戦いに耐えねばなりません。

先述した通り「名誉」の重要性は、物語の序文と筋書きの冒頭で述べられていたが、この場面では姫君ポーテの不倶戴天の敵を前にした戦いの直前に、ボードゥー自身の言葉で語られている。この「己の<sup>オノール</sup>名誉を守る」という決意は、出陣直前に現れる剣の名オノレと響きあっているとと言えるだろう。

この後、ボードゥーの軍は数のうえでは断然劣っていたものの、敵軍を前に戦いを優位に進めていく。そして最終的には、両軍からさらなる死者

を出さぬよう、ボードゥーがマドワヌ王と一騎討ちを行ってこれを制するという展開をたどる。戦いのさなかには当然ボードゥーが名剣オノレを手にしてはいたはずだが、2583行以降は物語の最終行4564行まで、オノレの名は2度と物語に出てくることはない。

## 8. おわりに

本稿の冒頭で、《アーサー王物語》では固有名を持った剣はめずらしく、アーサー王の剣「エスカリボール」(Escalibor)はむしろ例外的なケースだと述べた。それでは作中でエスカリボールの名はどのように説明されているのだろうか。管見の限り、エスカリボールの語義を記した最初期の作品の1つは、13世紀中頃までに成立した流布本系「聖杯物語群」に属する『メルラン物語』<sup>23)</sup>である。古フランス語散文で書かれたこの物語によると、ユテル・バンドラゴン王の死後、クリスマスにロンドンの教会前に石段が突如出現し、その上には剣の刺さった鉄床があった。剣を抜き取ることできる者が次の王になるとの銘文があり、誰も抜くことのできなかった剣を、アントールの息子として成長し16歳になったアーサーが難なく抜き去る。しかし諸侯たちはアーサー王の即位をなかなか認めようとせず、アーサー王の軍との戦いを続ける。

この戦いのさなかにアーサー王が先にロンドンの教会前で手に入れた剣を鞘から抜くと、たちまちまばゆい光が発せられ、剣には「エスカリボール」という名が刻まれていた。語り手はそこで「それはヘブライ語で『鉄も鋼も木も断ち切る』という意味の名前である」(‘Et c’est un non qui dist en ebrieu «trenche fer et acier et fust», p. 789)という説明をしている。これはクレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』<sup>24)</sup>の後半でエスカヴァロンの町に到着したゴーヴァンが町の人々の攻撃を受けることになったとき、彼が佩いていたエスカリボールについての語り手の「鉄も木同然に断ち切

ってしまう以上、これまでに存在した最高の剣」(‘La meilleur espee qui fust, / Qu'elle tranche fer come fust.’, vv. 5903-5904) という説明を踏まえたものであるに違いない。

そもそもエスカリボール (Escalibor) の名は、フィリップ・ヴァルテールが指摘するように、アイルランド語名カラドボルグ (Caladbolg) に由来する。そしてこのカラドボルグと関連づけられるゲール語の語根「カオト」(caot) や「カサウル」(callawr) は、「熱」を指すラテン語「カロール」(calor) に対応している (さらに「カロール」は「熱い、燃えている」を指す動詞「カレオー」(caleo) に由来する)<sup>25)</sup>。したがって語源的に見るとエスカリボールは、「燃えるように輝く剣」ということになるだろう。以上の点から、『メルラン物語』の語り手がエスカリボールの語義を説明するにあたり、語源に遡るのではなく文学伝承を踏襲したことが分かる。

こうした事例と比較すると、主人公が獲得する剣の名の由来が作中人物によって明かされるという『ボードゥー』のケースは、稀有な例と言えるだろう。しかも剣が作中で騎士が守るべき「名誉」というキーワードをもとに名づけられている点も新機軸である。すでに先学たちが指摘しているように、『ボードゥー』の主人公はクレティアン・ド・トロワの物語の主人公たちが成長過程で経験したような精神的な「危機」をまったく経験することなく、ボードゥーの王としての戴冠と姫君ポーテとの結婚という大団円に向けて一直線に進んでいく<sup>26)</sup>。「名誉」の剣に他ならないオノレは、ボードゥー (「穏やかな美丈夫」とポーテ (「美」という主役2人の寓意的な名前と同じように、ロベール・ド・ブロワの「道徳的・実践的教訓趣味」を反映した筋書きから生み出されたものだと言えるだろう<sup>27)</sup>。

## 注

- 1) 邦訳は、神沢栄三訳『ロランの歌』（『フランス中世文学集1』白水社、1990年、所収）を参照。
- 2) 中世フランス文学における英雄と剣のつながりについては、リシャール・トラクスラー（渡邊浩司訳）「余剰な1本の剣—古フランス語韻文物語『双剣の騎士』をめぐる」（中央大学『仏語仏文学研究』第49号、2017年、85-120頁）を参照。
- 3) G. D. West, *French Arthurian Verse Romances 1150-1300*, University of Toronto Press, 1969, p. 59 ; G. D. West, *French Arthurian Prose Romances*, University of Toronto Press, 1978, p. 108. なお「折れた剣」、「不思議な帯革の剣」、「魔剣」、「不可思議な武具」については、フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）『アーサー王神話大事典』（原書房、2018年）を参照。
- 4) 古フランス語散文『アーサー王の死』によると、ソールズベリーの合戦で甥モルドレッドから致命傷を負わされたアーサー王は、海の方へ馬を進めて海岸で馬を降り、鞘から抜いた剣を眺めながら、こう述べている。「ああ！ エスカリボール、優れた立派な剣よ、《不思議な帯革の剣》を除けば現世で最高の剣よ、いまそなたはそなたの主人を失うのだ」（天沢退二郎訳、『フランス中世文学集4』白水社、1996年、所収、239頁）。この科白によると、エスカリボールと「不思議な革帯の剣」がアーサー王世界で最高の2本の剣ということになる。
- 5) 従来の表記ではクレチアン・ド・トロワ。この物語作家については、拙稿「クレチアン・ド・トロワ」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社、2007年、53-62頁）を参照。
- 6) 従来の表記では『聖杯の物語』であるが、「聖杯」に相当する「グラアル」は「杯」ではなく、もともと「食卓で使われる広口でやや深めの皿」をさすため、ここでは『グラアルの物語』とする。なお「グラアル」については、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』、162-164頁を参照。
- 7) 拙稿「ペルスヴァルに授けられた剣と刀鍛冶トレビュシェットの謎—クレチアン・ド・トロワ作『聖杯の物語』再読」（『続 剣と愛と—中世ロマニアの文学』中央大学出版部、2006年、169-217頁）、および仏文による拙稿《Trébuchet, Wieland et Reginn. Le mythe du forgeron dans la tradition indo-européenne》（*Formes et difformités médiévales. Hommage à Claude Lecouteux*, Paris, PUPS, 2010, pp. 233-243）を参照。
- 8) 拙稿「3本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック—13世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」（『続 英雄詩とは何か』中央大学出版部、2017

年, 197-232頁) を参照。

- 9) 本稿での『ボードゥー』の引用には、ジャン・シャルル・ルメール版を用いる (Biaudouz de Robert de Blois, édition critique et traduction par J. Ch. Lemaire, Editions de l'Université de Liège, 2008)。
- 10) ロベール・ド・ブロワの生涯については、ジョン・ハワード・フォックスの労作 (J. H. Fox, *Robert de Blois, son œuvre didactique et narrative*, Paris, Nizet, 1948) の第4章を参照。
- 11) ボードゥーに母が一連の助言を与える場面は、クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』冒頭で、アーサー王の宮廷行きを決めたベルスヴァルに母が3つの忠告を授ける場面とよく似ている。
- 12) ゴーヴェンの息子を主人公とする物語の先行例は、12世紀末から13世紀初めにかけてルノー・ド・ボージュが著した『名無しの美丈夫』 (*Le Bel Inconnu*) である。この物語では、魔法に掛けられていた姫君ブロンド・エスメレ (グラングラス王の娘) を救出してくれる勇猛な騎士を求めて、姫君の侍女エリーがアーサー王宮廷にやってくる。どの騎士も名乗りをあげない中、この任務を引き受けるのが自分の名を知らなかったガンگران (ゴヴェンの息子) である。ガンگرانは「恐ろしい接吻」により、大蛇の姿に変えられていたブロンド・エスメレを人間の姿に戻す。物語の最後にはガンگرانがブロンド・エスメレと結婚する。「恐ろしい接吻」については、篠田知和基『フランスの神話と伝承』勉誠出版, 2018年, 35頁および、篠田知和基『竜蛇神と機織姫』人文書院, 1997年, 268頁を参照。
- 13) ウィンチェスターでの「3日間」の馬上槍試合のエピソードは、クレティアン・ド・トロワの現存第2作『クリジェス』 (*Cligès*) 後半で主人公が参加する、オックスフォードでの「4日間」の馬上槍試合のエピソードを想起させる。『クリジェス』の馬上槍試合エピソードについては、拙著『クレティアン・ド・トロワ研究序説』(中央大学出版部, 2002年) 第三部・第4章を参照。
- 14) ルノー・ド・ボージュ作『名無しの美丈夫』でも、アーサー王がガンگرانを呼び寄せるために馬上槍試合を開催し、試合の参加者が集まる町としてロンドンが出てくる (試合会場はヴァルドン)。
- 15) 亡失したのは写本の最後の2葉だけであり、筋書きはほぼ完結していると考えられる。
- 16) ローランが持っていたデュランダルも、決して折れることのない名剣である。致命傷を負い己の死期が迫っていると感じたローランは、デュランダルが異教徒の手に渡ることを望まず、何度も石塊に斬りつけて折ろうとするが、

剣は「折れもせざれば、刃こぼれもなく、空しく刃は宙に舞う」（前掲書・神沢栄三訳『ロランの歌』、95頁）。さらにデュランダル の 柄 頭 には、聖ペテロの御歯、聖バジールの御血、聖ドニの御髪、聖女マリアの御布といった、数多くの聖遺物が収められていた（同書、95頁）。

- 17) ボーテについて語り手は、彼女が立派な心の持ち主である点でフロランス（‘Florence’）に勝り、美しさの点でヘレナ（‘Elenne’）やセミラミス（‘Samiramis’）に勝っていると述べている（vv. 1476-1479）。このうちヘレナはスパルタ王メネラオスの妃でトロイア戦争の契機となった美女であり、セミラミスは美貌と英知を兼ね備えたバビロンの伝説上の女王である。またフロランスは『ボードゥー』の校訂者ルメールによると、ローマ神話に登場する花の女神フロラ（Flora）を指す可能性がある。語り手はさらに、ボードゥーがボーテと初めて会う場面で、妖精モルグ（‘Morge la fee’）の美しさはボーテの4分の1にもならないと述べている（vv. 2201-2202）。妖精モルグ（モルガース）はアーサーの異父姉妹として知られる美女である。
- 18) 13世紀前半の作とされる作者不詳の『双剣の騎士』（*Le Chevalier aux deux épées*）では、両親を亡くしてカラディガンの唯一の跡取りとなっていた姫君ロールが、「荒廃した礼拝堂」で手に入れ自分の脇につけていた剣を外すことのできる勇者を夫を迎えるべく、アーサー王宮廷を訪ねている（あいにくゴーヴァンは不在だった）。この剣の試練に成功するのは自分の名を知らなかった美貌の若者であり、その後「双剣の騎士」と名乗り、数多くの冒険の果てにメリヤドゥックという本名を知る。メリヤドゥックがロールと結婚する『双剣の騎士』の大団円は、主人公がボーテと結婚することになる『ボードゥー』の大団円と同じである。
- 19) A. Micha, « L'épreuve de l'épée », *Romania*, 70, 1948, pp. 37-50.
- 20) 騎士エルマレウス（Ermaletius）と、彼が恋する姫君の父の領国モンタボル（Montabor）の名は、この作品にしか現れない名前である。
- 21) ヴァース（原野昇訳）『アーサー王の生涯』（『中世フランス文学名作選』白水社、2013年、所収）112頁。
- 22) クレチアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』後半では、ティエボー・ド・タンタジェルの妹娘（「小袖姫」）が、彼女の代理騎士として馬上槍試合に参戦したゴーヴァンのために袖を授けている。このエピソードについては、小栗友一「《ゴーヴァンと小袖姫》と《ガーヴァンとオビロート》—ヴォルフラムのクレチアン受容について」（『名古屋大学言語文化部言語文化論集』第XIII巻第2号、1992年、3-15頁）を参照。なお中世ネーデルランド語で書かれた物語『袖をつけた騎士』では、主人公ミローデイスがワルウェイン（ゴ



ーヴァン)の従妹クラレットに恋をし、戦いで名を上げた後に結婚するが、彼が「袖をつけた騎士」と呼ばれたのは、クラレットからもらった袖をつけて馬上槍試合に参加したからである。ここでミロデイスの恋人として登場するクラレットの名は、『ボードゥー』に登場する姫君ボーテの侍女の名(古フランス語では「クラレット (Clarete)」, 現代フランス語の綴りでは「クレレット (Clairette) 」)と同じである。

- 23) 流布本系『メルラン物語』のテキストは、プレイヤッド版『聖杯の書』第1巻 (*Le Livre du Graal*, t. I, éd. sous la direction de P. Walter, Paris, Gallimard, 2001) 所収, *Merlin*, Texte établi par I. Freire-Nunes, traduit présenté et annoté par A. Berthelot による。なお『聖杯の書』の底本は、1286年に筆写されたボン大学図書館526番写本である。この写本については、フィリップ・ヴァルテール(渡邊浩司訳)『『聖杯の書』または13世紀散文《聖杯物語群》の誕生』(中央大学『仏語仏文学研究』第44号, 2012年, 211-234頁)を参照。
- 24) 『グラアルの物語』の引用は、プレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』(D. Poirion, (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994) 所収, ダニエル・ボワリヨンによる校訂本による。
- 25) 前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』, 75-77頁(項目「エスカリボール」)を参照。
- 26) L. Walters, "A Love That Knows No Falsehood": Moral Instruction and Narrative Closure in the *Bel Inconnu* and *Beaudous*", *South Atlantic Review*, 58-2, 1993, pp. 21-39, especially p. 28.
- 27) アレクサンドル・ミシャも『ボードゥー』の持つ教訓的な意味を強調している(A. Micha, « Beaudous », *Grundriss der romanischen Literaturen des Mittelalters: Le Roman jusqu'à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle*, Heidelberg, Car Winter Universitätsverlag, vol. IV, t. 1, 1978, pp. 386-387)。

